

# 地域社会における音楽活動の考察：旭川市「ネージュ・コンセール(雪のコンサート)」の事例 その1

著者	鈴木 しおり
雑誌名	生涯学習研究と実践：北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	5
ページ	143-158
発行年	2003-11-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002355/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002355/</a>

## 地域社会における音楽活動の考察

### —旭川市「ネージュ・コンセール(雪のコンサート)」の事例 その1—

#### Musical Activities in Local Societies :

#### The Example of “Neige Consert (Snowy Concert)” in Asahikawa City—Part 1

鈴 木 し お り

SUZUKI, Shiori

#### 抄 録

『音楽の街』と呼ばれる北海道・旭川市において、1979年の冬から1996年にいたる18年間にわたり、雪の季節にこだわって開催された音楽会『ネージュ・コンセール(雪のコンサート)』の発足とその主旨、さらにシステム・運営方法(マネジメント)に関して分析する。当会は、冬の旭川市において、中央の優れた専門家(作曲家・ピアニスト・声楽家)と地域住民(音楽家・音楽愛好家・一般市民)が一体となり、一連の音楽会・レッスン・公開講座等を企画してきた。その音楽共同体の中からは海外コンクールで入賞する新人も誕生するなど、地域にとって音楽的なレベル向上に大きく貢献してきた。

閉鎖的になりがちな冬の北海道において、雪とともに開催を継続してきた当会の活動内容を分析することで、北方圏における音楽文化の有りかたを考察する。

#### 1. はじめに

現代の教育・学習では、人々が学校ばかりでなく地域において共に学び、共に楽しみ、相互に関わりあうことによって、人間的に向上することが期待されている。社会の共同体の一員として、個性豊かな自身を必要としてくれる人々と心を通わせる“愛情のネットワーク”に支えられ、自己の学習の内容を深め、範囲を広げてゆくことが“生きる意欲”に繋がるとされているのである。そのことによって、子供・高齢者・障害者等の従来、社会的弱者、すなわち有能ではない人々とみなされていた人々が、実はそうではなく、それぞれの人が“最もその人らしくある”ための、自身の内的な満足度において有能さが測られようとしている。少子高齢社会を迎え、生産性第一主義の原理上につくられたこれまでのシステムが軋みはじめていえる。

今日、地域の教育力向上の施策基盤として、コミュニティ形成が重要視される中、人々は、“人と人とのかわり合い”の糸口を、どこに求めるべきか探しあぐねているのではないだろうか。特に、北海道は一年間の半分以上を雪に閉ざされ、ただでさえ人々は閉鎖的になり、互

いへの関心が薄くなりがちである。産・官・学一体となってあらゆる試みが成されようとしているが、すべての人々にかかわる“切り札”ともいえる施策は、簡単にはみつからない。

本論は、その“切り札”として“音楽によるコミュニケーション”を挙げる。北海道の地方都市・旭川市における市民音楽団体『ネージュ・コンセル（雪の音楽会）』の長年にわたる活動を分析することによって、人々の“生き生きとした生活”を支援する音楽人生への道筋（システム）を考察したい。

## 2. 研究の方法

『ネージュ・コンセル（雪の音楽会）』では、中央の優れた専門家（作曲家・ピアニスト・声楽家）と地域住民（音楽家・音楽愛好家・一般市民）が一体となり、一連の音楽会・レッスン・公開講座等を、1979年の冬から1996年にいたる18年間にわたり企画してきた。顧問である作曲家・（故）中田喜直氏が、「……昔は非常に遠くて、非常に寒い所であった旭川は、今ではとても近くて、とても暖かい親密な場所になった……」<sup>1)</sup>と述べたように、当音楽会は北海道の極寒の季節（1月下旬～3月上旬）での開催であったにもかかわらず、温度や距離の単なる数値では測れない“暖かく親密な何か”を人々の心に生んだのであった。その“何か”が魅力となって、18年間にわたり継続したのである。

本論では、旭川市以外の北海道の地域でも、北国の特色ある音楽団体が生まれることができるシステムを作り出せるよう、魅力となった“何か”を調査・分析することで、そこから普遍的な要因を見出したいと考え、調査・分析の項目を以下の4項目に分けた。

- ① 発足（動機）
- ② 主旨（念願）
- ③ 構成人員組織（システム）
- ④ 公演内容
- ⑤ 企画運営（マネジメント）

以上、分析結果の「考察」は紙面の関係上、「その2」で述べることにする。また、本論での混乱を避けるため、「地域住民」の定義を以下の3点に分類している。

- ① 地域（旭川市）の音楽家（地域音楽家・地域音楽指導者）
- ② 地域（旭川市）の音楽愛好家（地域音楽愛好家・地域音楽指導者）
- ③ 地域（旭川市）の一般市民

## 3. 発足と主旨

ネージュ・コンセル（雪のコンサート）の発足は、1978年2月、旭川市・市民文化会館における、『中田喜直の歌曲とピアノ曲による“武田敦夫・鈴木しおりジョイントコンサート”（武蔵野音楽大学同窓会北海道北支部主催）』の公演で、作曲家・（故）中田喜直氏とピアニスト・三浦洋一氏が来旭したことに始まる<sup>2)</sup>。公演後、三浦洋一氏は旭川市の音楽を勉強する

人々に対して、今後も継続して指導のため来旭することを約束した。ただし、三浦氏はスキーが趣味であるため、雪（パウダースノー）のシーズンに指導（レッスン）・音楽会を行うことになり、ここに“Neige Consort（仏語：雪のコンサート）”の名称が発祥し、会が結成されたのである。

三浦洋一氏を紹介したのは中田氏で、このジョイントコンサートの企画を担当した菅野龍雄氏は、以下のように述べている<sup>3)</sup>。

……「中田先生が、何回か旭川市で地域の人々と一緒に音楽会を開くうちに、『旭川の人々はピアノを弾かせても、歌を歌わせても大変上手だ。このままにしておくのは惜しいから、ひとつ中央の人と一緒にやってみてはどうか』というアイデアを下さり、三浦先生を紹介して下さいました。さらに、『彼（三浦氏）は、スキーが趣味だから、その際、スキーという言葉を使ったら絶対に大丈夫なので、声をかけてみなさい』というアドバイスで、私は東京の普門館での京都エコー合唱団の伴奏の後の三浦先生を、食堂へ追いかけていき思い切ってお話いたしましたところ、旭川市へ来ていただけるようになった訳です」……。

上記のような経過で発足し、翌年の1979年2月にネージュ・コンセールは第1回目のコンサートを開催した。以後、三浦洋一氏を中心に、日本の著名な音楽家<sup>4)</sup>を旭川市に招き、地域の音楽家はその指導を受けながら、1996年9月までの18年間に19回のコンサートと、それにまつわる数多くの企画（公開講座・公開レッスン、プライベートレッスン）を開催してきた。加えて、第5回目からは、声楽家（ソプラノ）・中澤 桂氏を迎えることで、歌曲やオペラにおいても一層充実したコンサートが企画された。これまでのコンサートでは、日本歌曲、ピアノ・デュオ、オペラ・アリアや合唱等の多様な実験的ステージを設けており、また、三浦氏によるピアノ公開講座は、1989年より継続的に開講された。

### 1) 音楽学習の導入時における「極楽な音楽体験」

ネージュ・コンセールを中澤 桂氏に紹介したのは三浦洋一氏で、氏はその時のことを次のように述べている。

……「中澤さんから、私もスキーを始めようかしら……と言う話を聞いた時に、僕は内心“シメタッ！”と思いました。彼女を旭川のスキーのゲレンデに誘うことができれば、そのまま音楽会に誘い出すことができると思ったからです。ご存じのとおり中澤 桂さんを演奏会にお招きしますと膨大なお金（演奏料）がかかりますが、スキーで旭川に誘い出すことができれば、そこはなんとか考えたのです」<sup>5)</sup>……。

中澤氏が、初めてスキー学校へ入ろうとして三浦氏に相談したところ、氏の推薦するスキー学校の基準は大変示唆に富んだものであった。その当時のことを中澤氏は次のように述べている。

……「一番最初のスキーの勉強は、“極楽スキー”でなくてはいけないということで、三浦さんが紹介して下さったのは豪華なホテルでのスキー学校でした。朝はカフェ・オ・レで起こされ

て、夜はフランス料理のフルコース。スキーで少しでも転ぼうものなら、すぐさま指導員が飛んできて助け起こしてくれるという指導法でした。初体験のスキーで少しでも嫌な思い、辛い思いをしては、その後のスキー人生が楽しくない。それでは生涯にわたり、続けることができない。スキー人生のスタートをきるのにふさわしいのは、“極楽なスキー体験”ということだったのです」<sup>6)</sup>……。

スキー学校では、転んでも自分で起きるのがルールである。初級者にとっては、転倒後、スキーやストックが絡まった状態の中から起き上がることは大変な苦労だが、その悪戦苦闘が練習の過程でもあり、この指導法は実践に則した合理的なものである。しかし、その合理性よりも、スキーに対する愛好や嗜好の心理をより大切と据える考え方は、音楽教育においても同じく当てはまる示唆に富んだものである。あらゆる学習はすべて“導入が重要”で、音楽人生のスタートも“極楽な音楽体験”でなくてはならない。すなわち音楽学習の導入は、“極めて楽しい体験”、あるいは日頃のストレスが“極めて癒される体験”であることが何よりも大切ということである。

普通、人々が何らかの学習に取り組むことは、気持ちに“ゆとり”がないと“億くう”が先立つもので、実現に移すことはなかなか難しい。しかし、童謡やカラオケなどから入る音楽であれば、幼児から高齢者まで、誰もが気楽に臨めるものである。それが“極めて楽しい体験”ならば、一生涯にわたり学習を続けることが可能である。

また、ジャズやロック、邦楽に民族音楽と、世界に音楽をもたない民族はおらず、音楽の種類も無限である。現在、こうしている間にも新しい音楽は生まれているのである。人類の無限の“個性”に対応できるのは音楽であり、同時に人類の“共存”を目指し「非言語コミュニケーション」として、互いの文化理解へと導く先駆的な役割をもつのも音楽である。

更に、音楽療法に見られるように、音楽は胎教からホスピスケアまで、生理的にも人間と深く結びつき、このことから人は音楽抜きにその人生を語ることは不可能に近いことが伺えよう。あらゆる芸術の中でも唯一、時間芸術である音楽は、同じく時間的存在である人間にとって、切っても切れない“人間そのもの”の存在なのである。このことから筆者は、音楽の学習を、多様な生涯学習の中で、人間として最も根源的な、しかも極めて楽しい、つまり最も導入にふさわしい学習として位置づけたいと考えている。

## 2) ネージュ・コンセールの3つの主旨

中澤氏は、次のように述べている<sup>7)</sup>。

……「旭川市に来るまでは、ネージュ・コンセールのことがよく理解できませんでした。代表者の武田さんに詳しく主旨や内容を聞き、共鳴する事ができたのです。私が新潟出身ということで、新潟での演奏会にはよく招かれ出演する機会があります。しかし、ネージュ・コンセールのように、地域の音楽家や音楽愛好者と一緒に演奏し、共演するということはありませんでした。なぜこのような演奏会が実現されるのか驚きでした。しかも、東京以外で。また、それぞれの演奏団体や演奏者が、中央のレベルと同じ水準にあることもびっくりしました」……。

そのネージュ・コンセールの主旨は、以下の3点である。

- ① 地域で音楽を志す有能な人材を、中央の楽界へ送り出すための布石とする<sup>8)</sup>
- ② 地域の音楽家のレベル向上を目指し、指導者を養成する
- ③ 地域に根ざした音楽芸能・音楽芸術を創造する

主旨①は、同じく旭川市の市民音楽団体「イル コンチェルト ディ ジョーバニ Il Concerto dei Giovani (若者の音楽会)」の「新人紹介、新人育成」の目的の延長線上にあるものである。その成功例として声楽家(テノール)・五郎部俊朗氏がある。氏は「若者の音楽会」第6、10回の出演に引き続きネージュ・コンセールの第3・6・8回に出演し、その後も中澤氏の学校公演等のステージで共演し、指導を受け、舞台経験を積み、ミラノ留学の後、海外のコンクールに入賞し、現在はプロフェッショナルとして活動している。特筆すべきは、1980年代にあって、東京を経由せず、直接、旭川市からイタリア・ミラノに渡り、帰国後、全国を舞台に演奏活動を展開していることである。特に、中澤氏からのアドバイスや仲介(紹介)が留学実現に導いたが、加えて、旭川市の音楽愛好家らによる実質的な応援・支援の存在も大きかった。まさにファンクラブとしての“愛情のネットワーク”<sup>9)</sup>による支えが実を結んだ一例である。

主旨②は、ネージュ・コンセールの中核となる主旨である。「演奏で特に営利を求めないが、自らの音楽水準を維持し高めるために、年に数回発表の場を設けることに努めなければならない」という地域の音楽家・音楽指導者を対象に、ネージュ・コンセールは一連の音楽会やレッスンを企画してきた。音楽事務所に属し、演奏で営利を求めなければならない職業的な音楽家・音楽指導者は対象にしていない。職業的な音楽家とアマチュアとの中間に位置する音楽家を対象にしている。職業的な音楽家からみると、地域住民としてしっかり地域に根ざした音楽家で人数も多く、何よりも生涯学習社会に最も必要な人材である。また、アマチュアからみると地域の文化人(無形文化財)であり、心強い指導者である。この中間層に位置する地域音楽家・音楽指導者こそが、その土地の音楽文化振興の鍵を握る人間なのである。

主旨③は、地域の音楽家(作曲家・演奏者・指導者等)と住民が一体となり、地域に根ざした音楽文化を創造することである。その期待に応えるように、1984年の『第6回ネージュ・コンセール・“オペラ”独唱・重唱の夕べ』公演を機に、出演者たちは「何年か後には、旭川市でオペラ上演を実現させたい」という希望をふくらませ、2年後の1986年に旭川市民オペラ研究会を発足させた。同会は、1990年に初めて旭川市民によるオペラ「魔笛」(モーツァルト)を上演<sup>10)</sup>し、その2年後の1992年には、札幌市在住の作曲家・木村雅信氏(札幌大谷短期大学教授)による「竹取物語」を初演することになる。ここに至って「地域の音楽家による地域に根ざした音楽文化を創造する」ことが実現したと言えよう。また、1987年には、『第7回ネージュ・コンセール・ピアノ・デュオの夕べ(1985年)』に出演した地域のピアニストが旭川ピアノ演奏研究会を発足させ、コンサートや講習会の企画、あるいは、自らの演奏研究等の多方面に

わたる生涯学習（リカレント）的な活動を展開した。

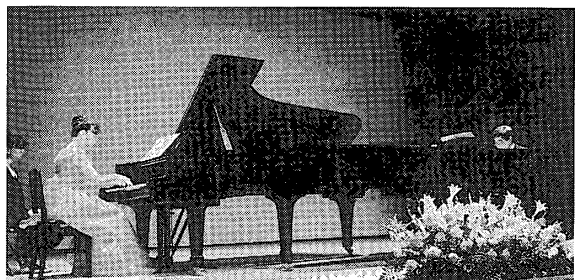


写真 1

第11回 “ピアノ・デュオの夕べ”(1988年 3 月)  
第 1 ピアノ 北川由美 第 2 ピアノ 三浦洋一  
曲目 ベートーヴェンの主題による変奏曲  
(サン・サーンス)

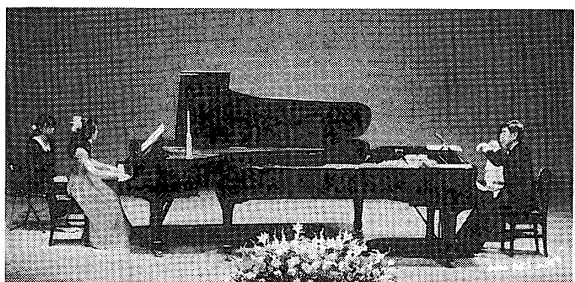


写真 2

第12回 “ピアノ・デュオの夕べ”(1989年 3 月)  
第 1 ピアノ 犬塚香澄 第 2 ピアノ 三浦洋一  
曲目 組曲「イベリア」(アルベニス) より  
“トゥリアーナ”

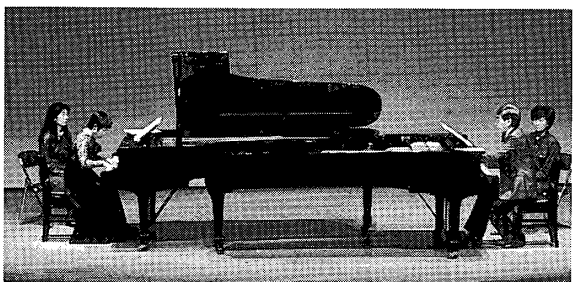


写真 3

第12回 “ピアノ・デュオの夕べ”(1989年 3 月)  
第 1 ピアノ 鈴木しおり 第 2 ピアノ 三浦洋一  
曲目 カプリツ (プーランク)

以上のように、三浦氏・中澤氏の両氏が旭川市に撒いた音楽の種が、現在、市民の手によってさまざまな形で豊かに実を結んでいるのである。

更に、ネージュ・コンセールが開拓した豊かな音楽土壌の上に、2002年 2 月には（故）中田喜直氏の幸子夫人・中澤・三浦の 3 氏を迎え、『第 1 回 旭川市・雪の降る街を音楽祭』（旭川市雪の降る街を音楽祭実行委員会・旭川市音楽振興会主催）が開催される運びとなった。北海道での数ある音楽祭は、ほとんどが夏に集中しており、その中において旭川市の極寒期での音楽祭は特筆すべきものがあるだろう。この音楽祭に関しては後述したい。

#### 4. システム（構成員組織）と主旨（念願）

ネージュ・コンセールは、次のような人員組織を形成し、運営してきた（敬称略）。

顧問:	(故) 中田喜直 (作曲家)、三浦洋一 (ピアニスト)、中澤 桂 (声楽家)
代表:	武田敦夫 (声楽家)
事務局:	鈴木しおり (ピアニスト)
後援会長:	(故) 神戸章仁 (医者)

※ 市民合唱が企画に挙げられる場合は、菅野龍雄氏（旭川音楽春秋社）が運営に加わる場合

もあった。

### 1) 構成人員略歴 その1—中央3名の略歴と信頼関係—

ネージュ・コンセールが19回に及ぶ実験的な企画を試みることができた要因は、中央3名の優れた専門家の指導力・影響力が大きい。以下に、3氏の簡単な略歴を述べる。

中 田 喜 直 —— (1923～2000) 東京に生まれる。1955年「ろばの会」を結成し新しい芸術的な子供の歌を作る運動を始める。1958年レコード「チュウちゃんが動物園へいったお話」で芸術祭賞（文部省主催 現在の芸術祭大賞）を受賞。以後の受賞歴は次のようである。

\*芸術祭奨励賞（「六つの子供の歌」1960年、女声合唱曲「美しい訣れの朝」1963年、「みえないものを」1965年、他）\*レコード大賞童謡賞（「ゆうらんバス」1960年、「ちいさい秋みつけた」1962年）\*日本童謡賞〔功労賞〕1971年（「雪の降るまちを」「夏の思い出」「ちいさい秋みつけた」「めだかのがっこう」等多数<sup>11)</sup>。

中 澤 桂 —— (1935～ ) 満州ハルピン生まれ。1959年「ルサルカ」の主演でオペラ・デビュー。1960年プラハの春国際音楽コンクール第3位入賞、「リゴレット」のジルダや「夕鶴」のつう、「ルチア」のルチア、「カルメン」のミカエラなどは、極めつけとして日本のオペラ上演史に残る名演とされている。チェコスロバキアの音楽を積極的に手がけてきた功により、1976年にチェコスロバキア共和国からスメタナ賞。また、第5回ウィンナーワールド・オペラ大賞（1977）等の受賞も数多い。1979年日本音楽家代表团として訪中し、「夕鶴」の中国公演で絶賛を博する。（中国沈陽音楽学校名誉教授も歴任）。他にも、タイやブラジルにおける「夕鶴」公演など、まさにわが国を代表するプリマドンナである<sup>12)</sup>。

三 浦 洋 一 —— (1933～ ) 歌曲・合唱曲のピアノ伴奏の第一人者として、日本の草分け的な存在。特に日本歌曲や邦人作品の合唱曲の初演を多く手がけた功績は大きい。そのピアノ伴奏は共演する声楽家の特質を深く把握し、微妙なニュアンスに富み、鋭い感性のひらめきをうかがわせる見事なものとして、高い評価を受けている。外来演奏家（バスティアーニ、タリアビーニ、コレルリ、テバルディ、ニコライ・ゲッタ、その他多数）の来日公演のピアノ伴奏も手がけた。レコード録音も数多いが、中でも「日本歌曲全集」(CD32枚、1988)は、一人で全32枚のピアノを担当し、不滅の金字塔と言える業績を残している<sup>13)</sup>。

以上が、三氏の簡単な経歴である。この優れた中央の専門家を顧問に、その指導や励ましを受けながら、ネージュ・コンセールが1996年までの18年間にわたり活動を続けてきたことは、何にもまして幸運なことであった。

中田喜直氏は、旭川市に馴染みの深い作曲家である。30年ほど以前から旭川市では、旭川市民が出演・参加する氏の作品コンサートが開催されており、「中田喜直・大中 恩・湯山 昭



“童謡三人展” in 旭川<sup>14)</sup>公演等、その他の中田作品による演奏会が、旭川市とその近郊で数多く開催されてきた。同時に、中田氏には旭川市の関係者からの委嘱作品も何曲もあり、市民に愛唱されている<sup>15)</sup>。

三浦洋一氏は、中田作品の初演をほとんど手がけ、レコーディングを行っている。特に、中田作品はピアノパートが充実しているため、伴奏者の責任が大きい。長年にわたり、中田作品を広く音楽界に紹介する役目を担ってきた三浦氏への中田氏の信頼は、厚いものがあるであろう。

中澤 桂氏は、「現在、日本歌曲の第一人者」<sup>16)</sup>「名人の芸域に達した歌唱表現―絶品―」<sup>17)</sup>と評されるように、誰にも追従を許さない日本語の美しさと、七色の声とも表現できる豊かな声質と声量を持つ歌手である。優れた作品は、優れた演奏家によって、より力強い生命を与えられるが、その意味で中澤氏と中田氏は、まれにみる芸術的な関係と言える。

三浦洋一氏のピアノ伴奏は、何よりも“声”という楽器に調和したピアノの音色であるという点で、他の追従を許さない。いかなるフォルテでも、音の割れることのない三浦氏のまろやかな音色は、オーケストラの演奏を彷彿とさせるものである。その意味から、三浦氏のピアノと中澤氏の歌も芸術的な関係と言えよう。

以上のように、3氏は以下の3点で深い信頼関係にあった。

- ① 音楽を通して芸術的に深く結ばれている
- ② 上野（現在の東京芸術大学）の同窓生である（三浦氏と中澤氏は、1年違いの先輩・後輩の間である）
- ③ スキーの愛好者である

次に、地元旭川市における組織の役割について述べる。

## 2) 構成人員略歴 その2―旭川市2名の略歴と念願―

この組織は、上記の3氏と地域の音楽家・音楽愛好家や一般市民との関係を調整するもので、その主な役割は、両者のさまざまな“出会い”の場を設定することにある。その内容は、以下の3点に分けることができよう。

- ① 地域の音楽家と音楽指導者が、中央の3氏に指導を受けてレベル向上を目指し、質の高い演奏（学習発表）を披露する場を設定すること。
- ② 一般市民に対して、3氏の作品・演奏を紹介し、鑑賞学習の場を設定すること。
- ③ 地域の音楽愛好者が、3氏と共演することで芸術的な音楽体験をする場を設定すること。

これらの“出会い”の場を設定することは、音楽イベント（音楽会、レッスン、公開講座）を企画・製作するための専門的な知識を必要とするものであり、また、音楽イベントの運営という実践面での経験も必要である。そのことから次に、代表の武田敦夫氏の略歴を簡単に述べてみたい。

武田 敦 夫 —— (1939年～ ) 旭川生まれ。武蔵野音楽大学専攻科卒 (声楽科)。第3回イタリアオペラ来日の際、二期会合唱団員として、トスカ、アイーダ等に出演。ミュンヘン国立音楽大学でハンノ・ブラシュケ氏に師事。旭川市でリサイタル開催 (1981)。1981年旭川市、1988年深川市における「ベートーヴェン第九」のバリトン独唱者。旭川市民オペラ研究会においてオペラ「魔笛」でパパゲーノ役 (1990)、「人買太郎兵衛」で太郎兵衛役 (1991)、「竹取物語」に翁役 (1992) で出演。また、ミュンヘンの声楽家と旭川市の地域声楽家との合同オペラ「カルメン (旭川市合唱団連盟主催、1991)」でモラレス役を歌った。

武田氏は武蔵野音大専攻科在学中、師事したドイツ人教師から、ヨーロッパの歌劇場で専属歌手の地位に挑戦することを強く勧められた。それを退け、郷里・旭川市の近郊で教師に就いた後も、そのドイツ人教師は再三にわたり渡欧を勧めたそうである。当時 (1960年代) に、新人を育成する『Il Concerto dei Giovani (若者の音楽会)』や『ネージュ・コンセール』のような音楽会が、氏を支える“愛情のネットワーク”として旭川市に存在していたなら、氏の人生も違ったかもしれないと筆者には思える。そのようなわけで、武田氏の「念願」の第1は、「地域の有能な人材を中央へ送り出す」ことであった。それがネージュ・コンセールの設立目的 (主旨) となった。また、同時にオペラ歌手としての訓練を受けてきた氏にとって、「旭川市における市民によるオペラ上演」が、その第2の「念願」であった。

先述したが、旭川市民オペラ研究会による「魔笛 (1990)」と「竹取物語 (1992)」でネージュ・コンセールの主旨が実現したが、1998年には、中澤 桂氏の主演 (つう役) と指導で、「ネージュ・コンセール オペラ劇場 “夕鶴の世界”」が、大雪クリスタルホール音楽堂での初のホール・オペラとして上演された。出演者・スタッフともに旭川市民が中心となって動き、オペラという総合芸術の地域における可能性を多く示唆した公演であったが、このことに関しては「その2」で述べてみたい。



写真 4

第5回 中田喜直 歌曲と合唱の夕べ (1983年3月)

中澤 桂 (ソプラノ)、三浦洋一 (ピアノ)

武田敦夫 (バリトン)

曲目「歌曲集 木の匙」(中田喜直)

事務局としての筆者の略歴は省略する。筆者は、これまで、旭川市が合唱や吹奏楽が活発な活動を展開し、レベルも全国的な水準にある『音楽の街』であると、内外から認められていることを、比較的冷静に受け止めてきた。音楽は、合唱や吹奏楽以外にも多くの分野にわたり芸

術的な作品が数多くあり、それらを楽しむ段階まで、市民の鑑賞力が育成されていないと考えたからである。とはいえ、旭川市もここ数年は、学校教育における新学力指導要領の導入の影響もあり、邦楽やジャズの活動が目覚しい。また、国際交流としての弦楽器セミナーも開催されるようになってきた。しかし、筆者の専門はクラシック（ピアノ）であるため、国内外の優れた演奏家や演奏団体によるコンサートに観客が集まらないことを憂慮していることには変わりはない。

1999年には、約80数億円をかけて「旭川市大雪クリスタルホール」が建設され、施設の音楽堂は音楽専用ホールとして優れた音響が得られたにもかかわらず、観客動員（聴衆の増加）は期待されるほど好転してはいない。また、市民のさまざまな音楽団体の活動も、地域住民に理解され、支援されているとは言い難い状態であろう。

筆者はその対策を、「地域音楽家の育成」と「地域指導者の養成」に求めている。つまり、地域住民に対して、地域の音楽家や音楽指導者が、質の良い音楽や生演奏を提供し、同時に、生活の中に“生きる喜び”として、人々が自ら歌を歌い、楽器に触れ、更に合唱やアンサンブルを楽しめるように支援・指導をして、日常生活に音楽を浸透させようというものである。

すなわち、当会における筆者の「念願」のその1は「地域音楽家・地域指導者の育成」であり、「念願」その2は「日常生活に“生きる喜び”としての音楽を浸透させる」である。以下に、個々の「念願」をまとめてみる。

- 念願1 「地域の有能な人材を中央へ送り出す」
- 念願2 「旭川市における市民によるオペラ上演」
- 念願3 「地域音楽家・地域指導者の育成」
- 念願4 「日常生活に“生きる喜び”としての音楽を浸透させる」

### 3) ネージュ・コンセール（雪のコンサート）公演一覧

一つ一つの公演内容を紹介することは、紙面の関係上、無理であるため、概要が推測できるよう、日時と場所、及び公演タイトルを以下に列挙する。尚、公演のより詳しい内容は「その2」で述べたい。

1. 1978年2月20日（月）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「中田喜直の歌曲とピアノ曲による－武田敦夫・鈴木しおりジョイントコンサート」
2. 1979年2月16日（金）……旭川市・公会堂  
「中田喜直・三浦洋一両先生を囲む——第1回 ネージュ・コンセール——」
3. 1980年4月15日（火）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「三浦洋一先生を囲むジョイント・コンサート——第2回ネージュ・コンセール——」
4. 1981年2月21日（土）……旭川市・公会堂  
「第3回ネージュ・コンセール “大中恩－歌曲と合唱の夕べ”」

5. 1982年2月20日（土）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第4回ネージュ・コンセール “ピアノ連弾の夕べ”」
6. 1983年3月12日（土）……旭川市・公会堂  
「ネージュ・コンセール・5周年記念演奏会 “中田喜直 歌曲と合唱の夕べ”」
7. 1984年3月13日（火）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第6回ネージュ・コンセール “オペラ” 独唱・重唱の夕べ」
8. 1985年3月14日（木）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第7回ネージュ・コンセール “2台ピアノの夕べ”」
9. 1986年3月15日（土）……旭川市・公会堂  
「第8回ネージュ・コンセール “オペラ” 独唱・重唱の夕べ」
10. 1987年2月3日（火）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第9回ネージュ・コンセール “ピアノ・デュオの夕べ”」
11. 1987年3月23日（月）……旭川市・ホテル東急イン（平安の間）  
「ネージュ・コンセール10周年記念特別演奏会 “中澤桂・栗林義信と共に歌う”」
12. 1988年3月18日（金）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第11回ネージュ・コンセール “ピアノ・デュオの夕べ”」
13. 1989年3月13日（月）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第12回ネージュ・コンセール “ピアノ・デュオの夕べ”」
14. 1989年3月20日（月）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第13回ネージュ・コンセール “オペラ” 独唱・重唱の夕べ」
15. 1990年3月6日（火）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第14回ネージュ・コンセール “ピアノ・デュオの夕べ”」
16. 1991年3月5日（火）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第15回ネージュ・コンセール “ピアノ・デュオの夕べ”」
17. 1991年5月23日（木）……旭川市・公会堂  
「第16回ネージュ・コンセール・歌劇 “フィガロの結婚” ハイライトの夕べ」
18. 1993年9月18日（土）……旭川市・大雪クリスタルホール音楽堂  
「第18回ネージュ・コンセール・中澤 桂 “心の調べ”」
19. 1996年6月30日（日）……旭川市・大雪クリスタルホール音楽堂  
「平成8年度大雪クリスタルホール自主事業  
『ネージュ・コンセール オペラ劇場－中澤桂 “夕鶴の世界”－』」

#### 4)「ネージュ・コンセール」の運営（マネジメント）

18年間の音楽活動を継続する際に、運営に関して特に留意すべき3つのポイントがある。

- ポイント① イベントにおける音楽内容の質がよいこと（経験的な判断基準は“リピーターが多い”“子供が集中する”等）
- ポイント② 観客動員が成功すること（絶対的な動員数ではなく、客席数との関係による相対的な動員数の意）
- ポイント③ 財政的に赤字にならないこと

以上の3点のいずれが欠けても企画が成功したとは言えず、たとえ数回は継続したとしても、長期継続を期待することは無理であろう。ここではポイント①、②に関しては省略し、ポイント③に関して詳しく述べてみたい。

近年は、文化芸術を対象にした国・道・市の補助金・助成金の種類も増えてきたが、その審査対象になるためには、ある程度の継続年数が必要であったり、申請のための詳細な書類作成が必要であったりする。それらをクリアし、助成を受けることは会にとって発展的なことだが、ここで注意したいことは、国・道・市の補助を受けすぎると、返って団体としての自立が難しくなり、補助が打ち切られたとたんに運営が不可能になる場合すら起きることである。

逆な視点から述べると、地域の音楽団体は運営的にも自主自立を目指すことで、組織としての“力をつける”ことができるとも言えよう。とはいえ、営利目的ではなく、あくまで低価格でチケットを設定し、多くの人々に聴いてもらおうとする主旨では、昨今の会場費・印刷費等の値上がり状況からは、運営困難になることは明白である。しかし、パソコンやインターネット等のメディアを利用・工夫して、その困難を乗り越えることが可能である。今後は、ネットワーク作りに始まるIT活用が音楽活動においても注目され、著作権等の複雑な課題も新たに生まれてはくるが、情報操作こそが運営(マネジメント)の大きな鍵をにぎることになるだろう。

ネージュ・コンセールは、18年間19公演のうちで、補助金を受けたのは、第19回目の「平成8年度大雪クリスタルホール自主事業『ネージュ・コンセールオペラ劇場——中澤 桂“夕鶴の世界”——』」公演のみである。あとの18公演はすべて、地域住民（音楽家・音楽愛好家・一般市民）との協力体制で赤字を出さずに運営した。それは、中央の専門家のフィランソロピー（philanthropy＝人間福祉を増進するための積極的な努力）<sup>18)</sup>によるところが大きいだが、それについては「その2」で述べたい。それ以外では、チケット代金・レッスン料・企業広告・寄付・祝儀等の形で収入となった。収支の一例を、図1、図2で示す。

図1. ネージュ・コンセール 決算報告 (レッスン)

## 決算報告

ネージュ・コンセール (雪の音楽会) ピアノ・デュオ レッスン

講師：三浦洋一 受講者：8名 (デュオ4組)

と き：1988年3月20日、15:00～19:00 ところ：〇〇さま音楽スタジオ

会計責任者：鈴木しおり (ネージュ・コンセール事務局)

収 入			支 出		
1	レッスン代金	15,000円×8人	1	講師 謝礼	100,000
			2	講師 宿泊(1泊)	7,000
			3	〇〇さま(会場)礼	3,000
			4	お茶菓子	2,000
			5	コピー、他	400
	合計	120,000		合計	112,400

$$120,000(\text{収入}) - 112,400(\text{支出}) = 7,600(\text{黒字分})$$

※ 〇〇さまのリサイタルの折、皆様に売券活動でお世話になったとのことで、会場費・ピアノ調律費(2台)を無料にしてくださいました。

※ 今回の宿泊費は、前日の19日分を負担しました。

- ・15～18日……ネージュ・コンセール (雪の音楽会) 負担
- ・19日……ピアノ・デュオ、レッスンのメンバー負担
- ・20日……市内の△△さまのピアノ発表会が負担  
(三浦先生がゲスト出演のため)

図1のデュオ・レッスンの決算では、「第11回 ネージュ・コンセール “ピアノ・デュオの夕べ”」と、「ネージュ・コンセール ピアノ・デュオレッスン」と、「△△さまのピアノ教室発表会」の3つの音楽組織で講師(三浦氏)の謝礼と旭川市滞在を支えていることが伺える。また、レッスン受講者(全員が旭川市内のピアニスト兼ピアノ教室講師)にとっては、地元で東京の先生から学ぶことができることから(実際、東京へレッスンを受けるために交通費をかけて個人で出向くことが多く、時間的・金銭的にも北海道在住の音楽家は学習に負担がかかる)、受講料15,000円は、実質は負担の軽いものである(自己のレッスン以外に、他の3組のデュオも聴講するため、聴講料も含まれている)。もとより生涯学習において、“自己研鑽の資金は自己負担する”ことは、継続学習し、自らの学習スタイルを形成する等、自主自立の意味からも重要であろう。

図2. ネージュ・コンセール 決算報告（公開講座、他）

## 決算報告

ネージュ・コンセール公開講座 三浦洋一 伴奏法・公開レッスン  
講 師：三浦洋一 レッスン受講者：6名

と き：1989年3月6日、16：30～20：30 ところ：マチイホール  
会計責任者：鈴木しおり（ネージュ・コンセール事務局）

収 入			支 出		
1	レッスン代金	5,000円×6人	1	講師 謝礼	80,000
2	前売り券79枚	158,000	2	講師 交通費・宿泊	50,000
			3	ピアノ調律(1台)	11,000
			4	会場	10,000
			5	チラシ・チケット印刷	10,000
			6	講師 昼食	1,720
			7	打ち上げ 補助	2,640
	合計	188,000		合計	165,360

**188,000(収入)－165,360(支出)＝22,640(黒字分)**

※ 1989年度 ネージュ・コンセール（雪の音楽会）企画事業・決算まとめ

3月6日「三浦洋一公開講座『伴奏法』」(黒字分)	△22,640
3月13日「第12回ネージュ・コンセール 2台ピアノの“夕べ”」(赤字分)	▲14,422
3月20日「第13回ネージュ・コンセール オペラの“夕べ”」(黒字分)	△13,276
合 計	21,494

※ 黒字分の21494円は、次年度企画への繰越金とさせていただきます。

図2の公開講座の決算では、レッスン受講生は聴講の観客に公開されるため、出演料金もあり、5,000円と安価になっている。前売り券は、プレイガイド等に置くだけでは配布が充分ではないため、第11回（1988）と第12回（1989）の「ネージュ・コンセール“ピアノ・ディオの夕べ”」の出演メンバーがノルマ（2,000円券、5枚）として売券に協力する。チケットを売ることが収入に繋がるのは当然だが、それと同時に観客動員が重要である。

以上の決算報告からも伺えるように、ネージュ・コンセールは、音楽大学を卒業し、郷里・旭川市へ帰ってきたピアニスト達の更なる“研鑽の場”“演奏の場”として有効に利用されていた。三浦氏は、その旭川市の音楽的環境をよく理解し、音楽大学では当時、比較的にり上げることの少なかった2台ピアノの作品を中心に指導・公演し、同時にアンサンブルの楽しさやピアノ伴奏の奥深さを、熱心に指導されたのである。

これら図1と図2の決算報告から、経費を抑えるために、あるいは捻出するために、多くの人々からなる協力体制が伺われよう。この協力体制が、人と人をつなぐコミュニケーションの

形成でもあった。本論の冒頭で述べたが、“人と人とのかわり合い”こそが現代社会で求められている最も重要な学習のひとつであろう。ネージュ・コンセールにとっては、このことは付加的・結果的なことであったが、安易に補助金に頼ってしまえば、質の高いコミュニティ形成は得られなかったものとする。数々の困難を、人々が寄り集まり、“愛情と熱意のネットワーク”で工夫し乗り越える“過程”には、すでに豊かな学習内容が含まれている。その意味で、生涯学習においては、経済的にもあくまで学習する本人の自助努力と、それを支え合うネットワークが大切である。

次回「その2」では、マーセルの音楽教育論、1994年に我が国で制定された「音楽振興法」や文化経済学の観点から、ネージュ・コンセールの分析項目を再考したい。

### 参考文献

- 1) 鈴木しおり著『地方都市の音楽文化振興の研究－旭川市における生涯学習の視点から捉えた市民の音楽活動－』1997年5月、中西出版。
- 2) 高橋恵子・波多野誼余著『生涯発達心理学』1990年12月、岩波書店。

### 引用文献

- 1) 『ネージュ・コンセール5周年記念演奏会“中田喜直 歌曲と合唱の夕べ”』1983年3月、旭川市公会堂、ご挨拶より（ビデオ資料）。
- 2) 『旭川音楽春秋』第4号、1983年1月1日、54～55頁。
- 3) 菅野龍雄（『旭川音楽春秋』編集・発行人）。『ネージュ・コンセール オペラ劇場－中澤桂“夕鶴の世界”－』1996年6月、旭川市大雪クリスタルホール ご挨拶より（ビデオ資料）。
- 4) 中田喜直（作曲家）、中澤 桂（声楽家）、大中 恩（作曲家）、栗林義信（声楽家）。
- 5) 三浦洋一氏のお話より（第18回ネージュ・コンセール“中沢 桂心の調べ”ビデオ）。
- 6) 中澤 桂氏談、1993年9月19日。
- 7) 第6回ネージュ・コンセール、プログラムご挨拶文より。
- 8) 武田敦夫「五郎部俊朗テノールリサイタルを聴いて」（『旭川音楽春秋』第16号、1989年1月1日、62頁）。
- 9) 高橋恵子・波多野誼余著『生涯発達心理学』1990年12月、岩波書店、69頁。
- 10) 武田敦夫「成功させよう市民オペラ」北海道新聞、1998年。
- 11) 「中田喜直の歌曲とピアノ曲による 武田敦夫・鈴木しおりジョイントコンサート」プログラムより、1978年2月20日 旭川市・市民文化会館。
- 12) 『中沢 桂・日本の名歌を歌う』（伴奏／三浦洋一）CDビクター音楽産業株式会社、VDC－1310のプロフィールより。
- 13) 同上。



- 14) 「子供も大人も楽しかったー中田喜直、大中 恩、湯山 昭 “童謡3人展” in旭川」(『旭川音楽春秋』16号、1989年1月1日、34頁)。
- 15) 「“北の街に鐘は鳴る” 披露演奏会開かる」(『旭川音楽春秋』第21号、1991年12月25日、34頁)。
- 16) 「題名のない音楽会」1993年、黛 敏郎(作曲家)の解説より。
- 17) 小山 晃「CONCERTS REVIEW声楽 中沢 桂 “團伊久麿の夕べ”」(『音楽の友』1993年8月号)。
- 18) 池上 惇『文化経済学のすすめ』丸善ライブラリー、1991年4月、65頁。